『予兆』

天も地もない禍々しい空間、魔界。
その奥にある巨大な塔の中に、男はいた。

かつてその男は、光の扉に飛び込み、故郷である現世界に帰ろうとした。
しかし、その先は望んでいた場所ではなく、この暗い魔物の世界へとつながっていたのだ。
地上での戦いで疲弊していた彼の身体がこの過酷な環境に耐えられるはずもなく、男は力尽き、魂だけの存在となった。

だが……。男は再び、肉体を再生させていた。
彼が従えていた大いなる悪魔たちの邪悪な術によって。
時間はかかったが、その分の価値はあった。

ジルバラードで起きた争いから生まれた黒い魔力は、魔界の彼の元にも流れ込み、以前よりも遙かに大きな力を与えていた。
その姿からはすでに人間らしさは失われていた。
魔力を帯びたロストチルドレンであり、己の野心のためなら、他者を犠牲にするのも躊躇わない、そんな強靭な精神と強い執着を持った男だからこそ、見るも恐ろしい姿に生まれ変わったのかもしれない。

「……。」

目覚めたばかりの男の傍に、大いなる悪魔の一柱が現れ、何ごとかを告げる。
それは男が探し求めていた力の在りかに関するものだった。
「そうか……。ついに、あれが見つかったか……。
そんな場所に隠されていたとは……。」

地上にいる娘達、そして息子に、自分が蘇ったことを告げてやらねばなるまい。
そのための使者を送り込むとしよう。これで計画を進められる……。

男は歓喜し、愉悦する。

その男の名は、ジルバと言った。

○

――なんだろう、今の感じ……。
遠くどこからか、つん、と引っ張られたような。ぞくっとするような。
よくわからない。でも、なんだか胸騒ぎがするような……。
「エリちゃん、どうしたの？」
「ひゃっ！」

「ぴ、ピコーン！？」
派手に声をあげたエリオに、チコのほうが驚いて目を丸くする。
「ご、ごめん。なんでもないよ！　ちょっと、ぼーっとしちゃった！　あ、お腹すいちゃったからかな？」
「あはは！　そっかー。でも、わたしもだよ～。」
そう言うと、二人は顔を見合わせて、ふふっと笑い合った。
ここは、ディオール魔法学園。
エンジェルを目指す卵たちが、魔界からの侵攻に備え、日々研鑽を重ねる場所だ。
今はちょうど放課後になったばかりで、授業を終えた生徒たちが教室から次々と出てくる。
エリオとチコも、学園の近くに併設された寮へと帰る途中だった。
「そうだ！『プチフレール』に寄っていこうよ。季節限定のケーキが出てるんだって。」
「賛成！　わたし、プリンが食べたいな～。エリちゃんは？」
「私は、季節限定にしようかなぁ……、でも、アップルパイも美味しいんだよねぇ……。あー、どうしよう！」
「あ、エリちゃん！　メルセデス先生だよ。」
廊下の向こうから歩いてくるのは、指導教官のメルセデスだ。
凛とした表情を浮かべ、長い髪を微かに揺らしながら、まっすぐ、足早に近づいてくる姿に、思わず二人の背筋もピッと伸びる。
「メルセデス先生！　さようなら。」
「……ああ、君たちか……。気をつけて帰るようにな。」

つい大声で話していた寄り道について、何か小言を言われるかと思ったが、メルセデスは簡素な挨拶を済ませると足早に廊下の先へと消えていった。
その雰囲気は、いつもより緊張していたようにも思える。
「……ねえ、どうしたんだろう、エリちゃん。先生、いつもと違うような感じじゃなかった？　何か、あったのかな……？」
「……うん……。」
エリオは、小さな手を胸元でぎゅっと握りしめる。
先ほど感じた違和感。メルセデスの堅い横顔。
なにかの予感が、少女の心に、小さなさざ波を立てていた。

メルセデスが向かったのは、学園の理事長室だった。
一際重厚な扉をノックして開けると、中では理事長のプリンセス・ティアラが、真剣なまなざしで、『何か』をディオールカードで占っていた。
「カードが警告している。危険な予兆……。メルセデス、あなたの方はどうだったかしら？」
優雅に小首をかしげ、ティアラが問いかける。
メルセデスは声を低く抑え、報告した。
「計測器が不穏な魔力を感知しています。恐らくは学園の地下の、アレが……。」
「そう……。魔物たちに知られなければよいのだけど……。」
そう口にしながらも、ティアラはそれが楽観でしかないことを心得ているようだった。

ゴシックは魔法乙女～さっさと契約しなさい！～

血戒編　血戦前夜

著者　山内シロウ

監修　若林明
古川守

改めてメルセデスを見つめ、彼女は命じる。
「救いの鍵の少年と乙女、悪魔たちを招集して。各地の調査をしてもらいましょう。なるべく、急いで。」
「わかりました。そのように伝えましょう。」
メルセデスは機敏に踵を返し、再び先ほどくぐったばかりの扉に手をかける。
だがそこで、足を止め、一言。
「……我々も、覚悟をしなくてはな。」
そう、呟いたのだった。

異変を察知していたのは、ディオール魔法学園においてだけではなかった。

真少年の住まう屋敷の近く。
夕暮れに染まる空を、ダチュラは、不穏な面持ちで眺めていた。
この感覚を……気配を、彼女は知っている。
なぜなら彼女は『悪魔』だから。
そこへ、明るい声が飛び込んでくる。
「ダチュラねえちゃん！　ボクたちに、学園に集まるようにって連絡があったぞ！」
赤い髪の妹は、伝令を嬉々として伝える。
彼女にとっては、頼りにされたようで、嬉しいのかもしれない。
「ありがとう、ジギタリス。他の妹たちにも声をかけておいてちょうだい。」

「うん、わかった！　けど、なんだろうな？　ティアラ姫が、また美味しいケーキでもご馳走してくれるとか？」
期待を隠せないジギタリスをそばにひきよせ、ダチュラはその髪を撫でてやった。
「いいえ、きっと、そうではないわ……。」
「ダチュラ……ねぇちゃん……？」
この空は……。嫌な予感がする……。
ダチュラの好む、混沌ではない。ただ、ただ……。
――破壊するもの。

同じ頃。
ヴォルカニア、セイレニウム、ウィンドリア、イシュタリア、ヘカトニスの上空に、奇妙な光が現れていた。
それはまだ小さなものだったが、太陽や月の明かりではなく、空間そのものを引き裂く、傷のような裂け目だった。

いや、たしかにそれは、傷だった。
いずれそれは、空間だけではなく。
心も、身体も、引き裂いていくのだ。

血をもって。
戦え、と。